



どんな大人になってほしいか

- 知恵と知識を持ち、人とのかかわり合いを大切にしながら自分の力を発揮できる人
- しっかりした土台を持ち、自分の力を出し切って夢を実現できる人
- 自分で人生を開拓していける能力とやる気を持った人



そのための小学校の役割

- どの学校へ行っても通用する教師（＝「自分流」を持てる教師、「一つひとつのことを丁寧に言いながら子どもを育てる姿勢を持つ教師」）を育てること
- 常に「取り組みが子どもの成長のためになっているか」を考えて指導をし続けること

未来に残したい 羽束師小学校の力強さ

- ◎ 教師一人ひとりがしっかりと「自分流」の指導観を持ちつつ、「子どもの成長につながっているのか」という点において、全員の思いが共通している
- ◎ 互いの思いや願いを受け止め、「学校家族」を目指して教師同士の信頼関係をつくりながら、プロ集団としての覚悟を持っている

京都府
京都市立羽束師小学校

プロ集団としての「学校家族」を
目指し、個々の教師が
持ち味を生かせる学校へ



京都市立羽束師小学校
荒木龍男
Araki Tatsuo
5学年担任、学年主任。「真理・真実を追究したい」



京都市立羽束師小学校
森口光輔
Moriyuchi Kosuke
6学年担任、学年主任。「長期的、計画的に出来る教育活動を大切にしたい。そして頼られる人に育ってほしい」



京都市立羽束師小学校教頭
中村博美
Nakamura Hiromi
「小学校6年間で子どもの描く夢がかなえられる土台の力を付けたい」



京都市立羽束師小学校校長
西澤安夫
Nishizawa Yasuo
「夢と希望の実現に向けて、子どもたちが自己の可能性にめいっばい挑戦する学校を目指したい」

School Data

設立	1978(昭和53)年
校長	西澤安夫先生
児童数	923人
学級数	32学級(うち特別支援学級3)
所在地	〒612-8487 京都府京都市伏見区羽束師菱川町640
TEL	075-934-1501
URL	http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=117708
公開研究会	未定



「子どもの成長のため」を第一に考えた指導

「子どもの成長のために、自分は何が出来るのか。皆さん、それぞれ強い思いや願いを持っていると思います。まずは、皆さんの思いや願いを全て教えてください。私はその思いを受け止め、出来るだけ応えていくところから学校経営を進めていきたいと思っています」

これは、3年前、西澤安夫校長が京都市立羽束師小学校に着任した際、全教職員に語り掛けた言葉だ。「子どもの成長のために」を第一に考えること、そして、「子どもの成長のために」考えたことを教職員が提案しやすい環境をつくり出していくこと。この2点を強調したのは、当時、同校は二つの課題を抱えていたからだ。一つは子どもの課題だ。同校は、工業エリア、商業エリアに加え、新興住宅街が混在する地域にある。家庭環境も多様で、経済的な困難を抱える家庭も多い。学習習慣が定着していない児童も多く、西澤校長の赴任時、児童の学力は京都市内でも下位にあったという。

二つめは教師の課題だ。自分の指導観を持つ個性的な教師が多い一方で、その思いが別々の方向を向き、学校全体としての結束力が弱かった。時として、子どもの姿よりも自分のこだわりが優先されているように感じられる状況もあった。このことが伝わっていたのか、落ち着

きがなく、教育活動にも集中して取り組めない子どもが多かったという。西澤校長は次のように話す。

「教師が強い個性や思いを持つことは大切です。学習指導要領の内容を『どう教えるか』こそ教師の腕の見せどころですから、自分なりのこだわりを持ち、それぞれが良いと考える取り組みをしてほしいと思います。ただし、その時に大切なのは、『取り組みが本当に子どもの成長のためになっているか』を常に念頭に置いているかどうかです。共通の思いを持った上で、一人ひとりが『自分流』の技を磨いていくことが出来れば、学校全体としての教育の質が一気に高まるのではないかと考えます」

これらの課題を解決するため、まずは学校教育目標を見直した(図)。その上で、西澤校長がまず心掛けたのが、教師一人ひとりの思いや

図 学校教育目標

◎重点目標

豊かな人権感覚を育み、未来を切り拓く個の育成を目指して

～人を大切にする子、
しっかり学習する子、元氣な子～

- は** はきはきと思いや考えを伝える子
- づ** ず(づ)っと地域を愛する子
- か** かわらぬ友情を大切にする子
- し** しっかりと話が聞き取れる子

考えを受け止めることだった。

「教師個々の取り組みが学校全体として一つの方向に向かわず、学力も低迷していたのは、教師一人ひとりの思いを受け止め、その思いをどうすれば子どものための取り組みにつながるかを、学校全体で考え、実践する環境が整っていなかったからです。そこで、私は『学校家族』をつくることを目標にしました。教師の思いを受け止めることに加え、教師が抱える児童や保護者の状況を理解して共有し、支援し合う関係です。管理職と教師、教師同士の信頼関係や共に実践しようという雰囲気があれば、教師の自発性は生まれません」(西澤校長)

教師の提案に筋が通っていれば、学校の取り組みとして承認し、教師全員で共有する。そうすることで他の教師の協力も得やすくなるし、結束力も高まるという。

同校の全教師約50人のうち20人以上は、教職歴6年未満の若手教師だ。そのため、若手教師



京都市立羽束師小学校
八田久美子 Hata Kumiko

栄養教諭。「子どもたちと食べる楽しさを共感し、食事を大切にする心を伝えたい」



京都市立羽束師小学校
鹿野公子 Kano Kimiko

4学年担任、学年主任。「人とのつながりを大切に、子どもたちを温かい人間環境の中で育みたい」

が管理職や先輩教師に自分の思いを伝えられるように心掛けています。中村博美教頭は話す。

「こちらから積極的に声を掛けたり、頑張っていることを必ず評価したりするようにしています。また、西澤校長は、職員室で空気を和ませて、話しやすい雰囲気をつくってくれてます」

更に、大切なのは「子どものことをよく知ること」だと、中村教頭は強調する。

「一人ひとりの子どもを担当ませにせず、朝会や職員会議では、どの子にどのような出来事があったのかを、教師全員で共有するようにしています。課題が多い子どもについては、特に担任の負担が大きいので、管理職も、教室の中だけでなく、遠足などの学校行事での様子や地域や家庭の事情を知っておき、子どものことを共有しています。担任と話し合えることが自然と増え、結果として支援することにつながります」

「学校家族」とは、仲良し集団ではなく、「志」を同じくしたプロ集団である。一人ひとりが教育に責任を持つ覚悟が必要になると、西澤校長は言う。例えば、保護者から苦情が寄せられた時には、まず担任一人で家庭訪問をさせる。ここで事態が収拾せず、保護者に何か言われたとしても、それは教師が成長するために乗り越えなければいけない壁だと考えるからだ。ただし、状況の改善が見られない場合には、「いつでも

一緒に行く」と伝える。

「若手教師でも安心して困難に立ち向かえる環境をつくることで、自発性が育ちます。教師は、子どもにやさしさや仲間を大切にすることや、自分の個性を発揮することを求めます。教師にも全く同じことが言えるのです。教師一人ひとりが力を発揮し、力を伸ばすための環境づくりは、子どもの教育環境づくりと同じと捉えて励んでいます」(西澤校長)

個々の持ち味を生かした指導が みんなに認められる環境をつくる

子どもの実態に合わせて、教師が自発的に実践することを大切にしている同校では、具体的な実践は各学年に任されている。各学年の取り組みを4〜6年生の学年主任、そして栄養教諭に聞いた。

◎6年生―学級間での授業交換

2週間に3回、担任が他の学級の授業を行う「授業交換」を、年間を通して実施する。誰がいつどの学級を担当するのかが分かる1週間のスケジュール表を作成し、先々の見通しを持てるようにしている。

「授業交換は、教師同士の良い刺激にもなっています。同じ指導内容でも、学級によって児童の反応が異なるため、自分の学級の良さや足りないものが見えてくるからです。また、新しい取り組みを行う時には、誰もが『少し工夫す

れば出来る』と思えるように、取り組みやすい環境をつくることを心掛けています。こうすると、他の学年でも取り入れやすくなり、学校全体の活性化にもつながると思います」(森口光輔先生)

◎5年生―「自主勉強ノート」での反復学習による基礎・基本の徹底

家庭学習習慣と、基礎・基本の定着のため、家庭学習用の「自主勉強ノート」を用意し、毎日2ページ以上、年間10冊以上を目指した取り組みを行っている。内容は、毎日の学習やテストの復習が中心だ。

「やり終えた『自主勉強ノート』が増えると、子どもは達成感を得られます。この取り組みを始めてから、学級が落ち着いてきました。学力が付いてくると、生活も安定し、子どもはすくすく育ちます」(荒木龍男先生)

◎4年生―なんでも言い合える関係づくり

算数の授業を中心に、自分の考えを他人に分かりやすく話したり、他人の意見をしっかりと聞き、話し合ったりすることを目指した取り組みを行っている。

「『自分の学級だけ』ではなく、どの学級も同じことが出来るように、学年団で密に話し合う機会を多く設けています」(鹿野公子先生)

◎食育―小学校と中学校の昼食の違いを学習

6年生では、小学校と中学校での昼食の違いを指導する。京都市立の中学校は家庭からの持



写真 教師の結束力は、子どもの結束力として実を結ぶ。2010年度の運動会では6年生が組み体操で80人による7段ピラミッドを作った。ピラミッドの後ろや土台を支える子どもも「頑張れ」と叫び続け、完成すると場内から大歓声が上がった。80人全員が主役となった瞬間だ

参の弁当か弁当給食を選択するため、バランスの良い弁当とはどういうものか、体格や運動量に合わせてどのくらいの量を食べる必要があるかなどを説明する。実際に中学校の給食を教材として、子どもが自分で持ってきた弁当箱に詰める作業をさせ、栄養面でのアドバイスもした。「栄養教諭は一人だけなので、授業では、子どもだけでなく先生方にも話し掛けるという意識で行い、食べることの大切さを折りに触れて子どもたちに伝えてもらっています」(八田久美子先生)

各学年で特色ある取り組みは異なるが、「子どもの成長につながっているか」という点においては共通している。6学年主任を務める森口

先生は、次のように話す。

「以前は、他の先生の取り組みや細かな考えが異なると受け入れられず、感情的に議論してしまうこともありました。西澤校長や中村教頭の言動から『まずは何でも受け入れる』という姿勢を感じ、取り組み内容は異なっても『思いは一緒』と考えられるようになりました。今では、若手の先生に『校長室で思いを伝えてきてみては』とアドバイスしています。ある若手の先生が校長室に行ったまま、2時間以上も帰ってこず、心配して様子を見に行くと、西澤校長と差し向かいで、授業研究の指導を受けていたこともありました」

このような意識が学校全体に広がり、取り組みが充実したことにより、子どもの学力は徐々に向上した。生活態度も落ち着き、子どもたちは、力を合わせて一つの取り組みを成し遂げられるようになってきた。運動会での組み体操はその成果の一つだ(写真)。



育てたい大人像と
そのための小学校の役割
どこに行っても通用する
教師を育てる

子どもには、将来どのような大人になつてほしいのか。先生方に聞いた。「社会に出て活躍できる、しっかりした土台を持った大人になつてほしい」(森口先生)

「将来は不透明かもしれないが、それに負けずに、将来を自分自身の手で開拓していける能力とやる気を持った大人になつてほしい」(荒木先生)

「人とかかわりを大切にし、迷った時には手助けや助言をしてくれるなど、周りに自分を育ててくれるような人がたくさんいる大人になつてほしい」(鹿野先生)

「なにかやりたいことがあっても、健康でなければ挑戦できない。そのためにも、自分の体のことや食事のことを大切に出来る人になつてほしい」(八田先生)

「自分が持っている力を全力で出し切り、夢を実現できる大人になつてほしい。そして、自分らしさを形作ってほしい」(中村教頭)

「知恵と知識、そして人を大切に思う思いを携え、自分の力を発揮できる人になつてほしい」(西澤校長)

そうした人に育てるために小学校で果たすべき役割は、どのような学校で勤めることになつても通用する教師を育てることだと、西澤校長は話す。

「子どもの成長を願いながら、『自分流』を持つ教師、一つひとつのことを丁寧に言いながら子どもを育てる姿勢を持つ教師を育てていくのが私の役目です」

一人ひとりの指導観や取り組みは多様だが、「子どもの成長」への思いを一つにして、同校は今日も前進し続けている。